

障害者スポーツ指導者の 社会的勢力に関する基礎的研究

～障害者アスリートが知覚する関係性の観点から～

岩元 三栗

【目的】

本研究は、普及・増加が見込まれるとされる障害者スポーツ指導者の現状を踏まえて、障害者アスリート(当事者)が知覚する指導者との関係性の現状に着目した。その目的は、障害者アスリートに影響を及ぼしていると予測される指導者の社会的勢力の観点から、選手と指導者の関係性の現状を検討し、障害者アスリートと指導者の関係性の向上を期待するとともに、障害者アスリートが求める指導者の専門性とその関係性の基礎資料に役立てるところにあった。

【概念の操作化】

本研究では、健常者のスポーツ現場における指導者に必要な要素として、「専門的指導力」と「コミュニケーション力」の2つの観点を採用し、そこに「日常生活ケア力」という福祉的・介助的な観点を加えて、障害者スポーツの指導者に求められる要素を「専門的指導力」、「コミュニケーション力」、「日常生活ケア力」の3つの観点から検討した。それぞれの構成要素には、先行研究をもとに指導者の各社会的勢力を援用して、概念の操作化をおこなった。

【研究方法】

2019年9月から2020年2月にかけて質問紙調査を実施し、日本代表選手から日常的な愛好者までを含む、障害者アスリート(車いすソフトボール40名、シッティングバレーボール13名、車いすバスケットボール124名)合計177名から回答を得られた。質問内容は、属性およびスポーツのキャリア特性について10項目、指導者の属性について6項目、現在の指導者について27項目、指導者との現在の関係について5項目、合計48項目、5点リカート方式にて尋ねた。

【結果と考察】

選手の属性別にみた選手が知覚する指導者の社会的勢力の結果によると、選手が知覚する指導者の「専門的指導力」では、「専門勢力」と「利益勢力」の2項目で、男性よりも女性の方が強く認知していることが示された。選手が知覚する指導者の「コミュニケーション力」では、「指導意欲勢力」と「高め合い・称賛する姿勢」の2項目で、受傷からの経過年数が浅い選手の方が、経過年数が長い選手よりも、指導者からの利益や指導意欲、共感性を高く受容している傾向にあることが示された。選手が知覚する指導者の「日常生活ケア力」では、「健康維持力」と「介護力」の2項目で、女性よりも男性の方が強く認知していることが示された。選手の障害の程度や受傷前のスポーツ経験の有無による比較は、いずれの項目にも差が認められなかった。

以上の結果から、選手が指導者に感じている主な現状として、以下の3つが挙げられる。①女性選手は男性の指導者に対して専門・利益勢力を認知しやすい。②受傷からの経過年数が浅い選手やさまざまなフィールドをもつ選手にとって、スポーツはコミュニケーションを共有する重要な場である。③障害者スポーツは、性別、年齢、障害の有無、スポーツ経験の有無に限らず、誰もが参加できるスポーツとして普及啓発の過程にあるため、選手が知覚する指導者の社会的勢力や指導者との関係性に、受傷前のスポーツ経験の有無やその競技経験は関係ない様子である。

指導者の属性別にみた選手が知覚する指導者の社会的勢力の結果によると、選手が知覚する指導者の「専門的指導力」では、女性選手の方が男性選手よりも、異性の指導者に指導してもらうことによって利益を受容していることが示唆された。指導者の障害の有無においては、専門・利益・準拠のすべての勢力で強い関連を示した。障害のない指導者よりも障害のある指導者の方が、当事者性が高く、選手にとって身近なロールモデルとして感じられる傾向にあることが示唆された。選手が知覚する指導者の「コミュニケーション力」では、障害のある指導者に対して、親近・受容や指導意欲、高め合い・称賛する姿勢を感じる傾向にあった。選手が知覚する指導者の「日常生活ケア力」では、異性の指導者よりも同性の指導者の方が、環境に対する理解や介護力を感じさせる傾向にある。また、指導者の障害の有無において、選手は障害のない指導者に対して、「介護力」を求めていることが明らかとなった。

以上の結果から、選手が指導者に感じている関係性の現状の特徴として、以下の5つが挙げられる。①女性選手は男性の指導者に対して専門勢力・利益勢力を強く認知する傾向にある。②障害のない指導者よりも障害のある指導者の方が、当事者性が高く、選手にとって身近なロールモデルとして感じられるためコミュニケーションがとりやすい。③異性の指導者よりも同性の指導者の方が、環境に対する理解や介護力がある。④選手は、障害のない指導者に対して「介護力」を求めている。⑤選手は、障害のない指導者に対して介護力を求めている状況にあるが、その介助に対して

不満を感じている可能性がある。

選手が知覚する指導者の社会的勢力の満足度およびロイヤルティに関する結果によると、選手は、指導者の人間的に尊敬できる部分や、モチベーションを高めてくれるコミュニケーション、話を聞いてくれる共感性、障害者の環境の理解、競技に関する知識や専門性等に、満足やロイヤルティとの関係が強いことが示唆された。一方で、選手自身の性格のことを理解したり、競技以外のプライベートな話をするのは、指導者に対しては求めている傾向にある。つまり、選手はスポーツを通して指導者の専門的知識や指導力、コミュニケーション力を求めているが、競技志向性が高いスポーツ集団の場合、プライベートな部分までは介入を求めている可能性も考えられる。また、選手と指導者との関係性の現状としては、満足と関連する要素が多く、良好な関係性であることがうかがえた。一方で、選手が指導者を感じている関係性の特徴として、選手は障害のない指導者に対して、介護力を求めている状況にあるが、その介助に対して不満を感じていることもわかった。今後の障害者スポーツ指導者に求められる要素として、性別・障害の有無・専門性・介護力など、まだまだ課題が山積みである。